
運を貯める男

SEI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運を貯める男

【著者名】

ZZマーク

SETI

【あらすじ】

「ペペジやあつません。

「運が悪かった……」

「あの時あんな事が起きなければ……」

「どうしてこのタイミングで……」

何も知らない人間ならこんなセリフは負け犬の、単なる言い訳にしか聞こえないだろう。

「頑張れば報われない事は無い」

「努力は必ず報われる」

僕はかつてそう思っていた。

だけどそんなのは嘘つぱちだ

世の中にはどうしようもない不運がある、そんな事は知りたくないかった。

知りたくなかったけど、知つてしまつた、知らされてしまつた。
致命傷な失敗というのは、理由がないのだ。

父さんは教えてくれた。

「なにか失敗した時、運を言い訳にしてはいけない。自分の失敗を認めたくないから『運』というものに責任転嫁してしまるのは確かに乐だろう。だがそういう人間は必ず同じ失敗を繰り返す。運が悪かつた、で思考停止してしまつて原因を考えないからだ。なにか悪いところが無かつたか、努力が足りなかつたのではないか、と自分の失敗に向き合えば、同じ失敗は一度と繰り返さないだろ?」

父さんはとても责任感の強い人だつた。真面目で努力家な父さんを僕は尊敬していましたし、その言葉は子供ながらにとても正しい事に思えた。

だけど……その言葉が正しくなかつたと教えてくれたのも父さんだつた。

父さんは本当の不運に出会つてしまつた。

五年前、僕が小学五年生の時だつた。

父さんは車を売る仕事をしていた。眞面目で努力家な父さんはその仕事ぶりを認められて昇進する事になつた。営業部の仕事から本社の人事部に異動する事になつたのだ。

僕はその話を聞いて「おめでとう、よかつたね」と無邪氣に父さんを祝福した。

すると父さんはなぜか眉をひそめて「そう、だね」と言つて僕の頭を寂しそうに撫でてくれた。

……？ 父さんがなんで喜んでいないのか不思議だつたけど僕はたいして気にもとめなかつた。

その翌日から父さんはいつもより早く家を出るようになり帰りも遅くなつていつた。

父さんと会える時間が少なくなつて寂しかつたけどお仕事頑張つてるんだろうな、と父さんへの尊敬は変わらなかつた。

それからしばらくすると、父さんの様子は僕にもわかるくらいに変わつていつた。

夜遅くに帰つてくる父さんは、枯れた植物のように元気がなく疲れきつた顔になつていつた。

その顔は僕が今まで見た事がない顔だつた。今まで父さんはどんな疲れた時でも笑顔で僕の頭を撫でてくれていたのに。

僕は不安になつて母さんに尋ねた。

「父さんショウウシンしてからお仕事大変なのかな、なんだかとても疲れてるみたいで、僕心配だよ」

「……そうね、お父さんは人一倍真面目な人だから、きっと色々な事を考え過ぎているんだと思う。でもきっと大丈夫、お父さんは立派な人だからお仕事が一段落したら前みたいに元気になるわよ」

「そうかな……」

「大丈夫、ほらそんな不安な顔しないで。お父さんを信じて、ね？」
「うん……わかった」

だけどそれから半年経つても父さんは相変わらずだった。話しかけるのもばかれる程に疲弊した父さんを見るのはとても辛かつた。そんなある日の夜、僕は寝室で眠っていると父さんに起こされた。寝ぼけ眼で起き上ると「大事な話があるんだ、起きれるか？」と言われ僕は居間へと連れて行かれた。

居間に行くと母さんも居て僕に暖かいお茶を入れてくれた。
僕は母さんに礼を言つて椅子に腰掛けると動搖を隠せず早々に尋ねた。

「いつたいどうしたの？ 大事な話つて？」
「……父さんが今何の仕事をしてるか、知ってるか？」
「えつ？ 車を売るお仕事でしょ？」
「車を売る会社では働いているけど違つんだ、父さんが今してることはない……」

その時初めて僕は父さんが働く人事部でしている仕事を知った。
父さんは子供の僕にもわかるように丁寧に、真摯に説明をしてくれた。

父さんの仕事は……リストラ、同僚の首を切る事だ……と悲哀な表情で。

僕には父さんの辛さが容易に想像できた。

いっぱい苦しんだんだろう、いっぱい悩んだんだろう。だって父さんは優しい……とっても優しいから。

父さんは目からは涙が溢れていた。

いつも頼りがいのある父さん、いつも明るい父さん、いつも正しい父さん、そんないつもの父さんからかけ離れた姿だった。

そして、父さんは自動車の会社を辞める事に決めた。僕も母さんも反対なんかしなかった。むしろ父さんが辛い仕事を辞めてくれて、ほっとしたくらいだった。

これでこそし前までのような幸せな日常が戻る。一緒に食事をして、テレビを見て三人で笑ったり、たまに外に遊びに連れて行ってもらったり。そんな平凡だけど、究極に幸せな日常が戻ってくる、そう思っていた。

そう思っていたのに……

父さんが仕事を辞めて間もなく、母さんはパートに出る事になった。近くのスーパーでの仕事だった。別にお金に困っていた訳では無いらしかった。ただ母さんは、父さんに焦つて欲しくなくて、家の心配をして欲しくなくてそう決心したらしい。でも本音の部分は、一度働いてみたかったからという事だったのかもしれない。だって母さんはとても楽しそうだったから。

父さんはわずか一週間余りで新しい仕事を見つけた。カーナビとか専用品の営業の仕事らしい。今まで働いてた経験のおかげで、これまでと変わらないような役職につけたらしい。

さすが父さんだな、そう思った。でも当たり前かもしれない。父さんは誰が見たって、とても真面目で立派で頼りになる、僕の憧れなのだから。

僕と父さんにとって最悪の不運は不意にして訪れた。

母さんが倒れた。

それは母さんがパートで働いていた時の事だった。死因は急性心不全という、いわゆる原因不明の死因だった。母さんは僕らが心の

準備をする暇もなく、あつといつ間にこの世を去つていった。

僕は泣いた。喉が枯れる程に声をあげ、ただひたすら、力の限り泣き続けた。

父さんは泣かなかつた。

だが、自分を傷つけ続けた。自傷行動といつらしい。両の爪で顔面を引っ搔き、手当たり次第の壁に頭を叩き続けた。病院の人達が必死になつて押さえつけるまでそんな自傷行動を続けた。

父さんは入院することになり、次に会つた時にはもう……壊れていた。

僕の事もわからない。一人で立ち上がる事も食事をする事も出来なくなつていった。

出来る事と言えばただぼそぼそと同じ言葉を呴く事だけだつた。

「俺が悪いんだ、俺が、俺が全部、俺が、すまないすまんしまないすままあい」

同じ言葉を壊れた人形のように呴き続けていた。

僕には父さんが何を考えているのか手に取るよう理解ついていた。責任感の強い父さん。その強迫観念にも似た責任感は今回の件を全て自分のせいだと思い込んだのだろう。

自分が仕事を辞めなければ母さんはパートに出る事はなかつた。パートで働く事がなければ母さんが死ぬ事なんてなかつた。だから母さんが死んだのは全て自分のせいだ。

おそらく父さんはそんな事を考えたのだろう。

責任感の強い父さんは、その思い込みから目をそらす事も出来ず真つ正面から受け止めた結果……壊れてしまつたのだ。

父さんは何も悪くなんかない、父さんが責任を感じる事なんかじやないはずなのに。ただ運が悪かつただけだ。

母さんが死んだ、父さんが壊れた。

あんなに暖かくて平穏だつた僕らの家族は、振りかぶつた斧で何度も叩き付けるよつに不幸が突きつけられ、いとも簡単に崩壊した。

いつも頼りがいのある父さん、いつも明るい父さん、いつも正しい父さん、そんな父さんは本当に僕の憧れだった。

だが父さんは今や、僕が最もなりたくない姿になってしまった。

僕は恐くてたまなくなつた。

いつか僕も父さんみたいな不幸に見舞われるんじやないか？ そんな不幸はいつ起つるかもわからない、明日訪れるのかもしれない！ 僕は恐くて恐くて、毎日震えて引きこもつた。

しばらく引きこもつた結果、僕は一つの答えを出した。

「運を貯めよ！」

馬鹿げた考えだと思う。だけどそれしか考えられなかつた。神様の存在なんて信じられなかつた。もし神様がいたとしても、どんな理由で僕の家族に不幸を届けた？ 父さんみたいな誠実な人間でもあんな不幸を届ける神様だ。僕にも間違いなく届けてくるのだろう。そんなものに頼るくらいなら自分の手で。どうにもならない事をかもしれない。でもそのどうにもならない事を、どうにかする為に僕は必死だつたのだ。

(後書き)

運を貯めるってどうすれば良いんだろう? 何かアイデアあつたら
お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2647q/>

運を貯める男

2011年7月21日03時11分発行